

### 第3節 ● 温通法の針具

古人は「技術者が自分の仕事を立派に行おうとするなら、まず道具を整えなければならない」といっている。すなわち火針療法をしっかりと修得しようと思うなら、まず思い通りに使いこなせる針具が必要である。

はじめに紹介するのは、火針針具の材料である。火針を製作するための材料は、通常の毫針のものとは異なる。火針はその針体が赤くなるまで高温に加熱し、瞬時に人体の腧穴あるいは部位に刺入するので、その材料には、耐熱性と強靱性とが兼ね備えられていなければならないという特徴が要求されるからである。つまり高温での加熱に耐え、しかも堅固で曲がらないという、耐熱・強靱の性質である。繰り返し臨床実験が行われた結果、選ばれた最も理想的な材料は、タングステンとマンガンの合金であった。この材料から、加熱せずに30号の合金スチール・ワイヤーを作り、それから再加工して火針を作る。この材料から作られた火針は、赤くなるまで針体を焼灼しても、なお針体がまっすぐで堅固なままであり、皮膚・筋肉および瘢痕結合組織をスムーズに刺すことができ、しかも針体は曲がりやすかったり折れたりしない。そのほか、この材料から作られた火針は、耐久性があり、1本の針を何回も繰り返し焼いて使用することができて、価格も廉価なので、火針の材料としては最も理想的である。

火針の針具は条件が特殊なため、多くの医師は自ら製作して、さまざまな症状の必要性に応じて使用している。製作にあたっては、まずタングステンとマンガンの合金のスチール・ワイヤーを、太さに応じて、6～12cmの長さに切断してから、小型の砥石車でその一端を研磨し、さらに油砥石で光沢が出るまで研磨する。その後針柄を付け加える。針柄は短すぎないように通常は3～4cmにして、手を火傷しないようにする。針柄の取り付け方法は、細い銅線を巻いてらせん状の細巻きにして、さらにしっかりと巻いた銅線を針の一端に巻きつけ、銅線の両端を接着剤で針に固定する。以上が火針製作の基本過程である。多くの医療用針工場は火針

の針具を生産していないので、火針の製作は自分で覚えなければならない。方法は簡単で覚えやすく、複雑な工具や設備は必要ない。完成した1本の火針は、次の3つの部分に分けられる。

第1の部分は針尖であり、火針の針尖は毫針のように鋭利でなくてもよい。尖っているが鋭くないもの、やや丸みを帯びたものがよい。それは、火針は赤く焼かれた状態で皮膚に刺入するものなので、毫針の刺入よりもずっと簡単だからである。そのため鋭利である必要はない。針尖が鋭利だと繰り返し焼いて何回も使用するうちに、針尖がもろくなって、折れやすくなる。

第2の部分は針体である。火針の針体は、堅固でなければならない。火針療法の針具は、赤く焼いた状態で用いるので、刺針時に針体は毫針のように手指で支えることができない。しかも、火針で刺す腧穴あるいは部位は、病変部位のことがあるので、堅くなっていて、針体は曲がりやすい。そのため火針の針体は堅固でなければならず、とりわけ赤く焼いた後でも堅固である必要がある。これはすなわち、火針の材料が必ずこのような特徴を備えていなければならないということである。ここでの針体はまっすぐでなければならず、まっすぐならば患者の苦痛を減らすことができ、針の刺入や抜針にも有利で、針孔を大きく開口させないため刺針後の保護にも都合がよい。

第3の部分は針柄であり、火針の針柄は、毫針の針柄よりもさらに重要である。針柄は術者が針を持つ部位となるだけでなく、手を火傷しないように熱から離しておくところでもある。針柄によって手を火傷しないようになっており、術者は火針が赤くなるまで焼くことができる。そうやってこそ、速く、正確で、着実に火針を患者の決まった腧穴あるいは部位に刺入することができる。つまり、火針の針柄は持ちやすく作るだけでなく、さらに重要なことは熱から離すということである。

臨床では、症状や腧穴によって、太さの異なる火針を選んで用いる。火針の太さは治療効果と密接に関連するため、治療に際して使い分けるのに都合がよいよう、太さの違いによって火針を分類しておく必要がある。临床上の必要に応じて、火針を、①太い・②中ぐらい・③細いという3種類

に分ける（図3-1）。

### 1. 細い火針

直径0.5mmの火針で、これが細い火針である。細い火針は、顔面部の腧穴などに用いる。顔面部は、神経や血管が多いので、細い火針を用いることによって苦痛を緩和することができる。また、顔面部は美容上の影響があるので、太い火針を用いて処置が不適當だと、痕が残りやすい。筋肉の薄い部位や、老人・子供および体質の虚弱な患者には、いずれも細い火針を用いるのがよい。

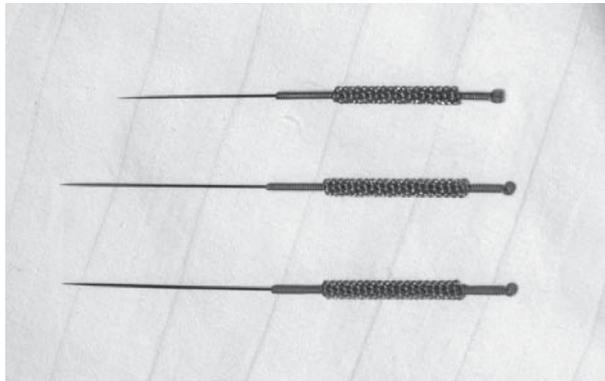


図3-1 太さの異なる3種類の火針

### 2. 中ぐらいの太さの火針

直径0.8mmの火針で、これが中ぐらいの太さの火針である。中ぐらいの太さの火針の応用範囲は広く、顔面の部位や筋肉の薄い部位以外は、どの腧穴や部位でもこれを用いて施術することができる。手足や体幹などで、圧痛のあるところや病巣の周辺に用いる。

### 3. 太い火針

直径1.1mmあるいはそれより太い火針で、これを太い火針という。太い火針は主に、瘻孔・痔瘻・リンパ節結核（頸・腋・腹・鼠径部など）・

癰疽・乳腺炎・脛骨部の潰瘍・腱鞘囊腫・神経性皮膚炎・各種の結節・皮膚の腫痛などの病巣部位を刺針するのに用いる。

火針療法は、火針の針具のほかに補助道具が必要であり、火針療法はそれらがそろって完成する。アルコールランプを用意して、針を焼くのに使う。右手に針を持ち、左手にアルコールランプを持つ。ランプには95%のアルコールを入れるが、入れすぎて溢れ出たアルコールで事故が起こらないよう、入れすぎに注意しなければならない（図3-2）。



図3-2 針を焼くのに使うアルコールランプ

## 第4節 ● 温通法の施術

火針療法の施術は、他の刺針方法とは大きく異なっている。それは、針体を加熱するという過程があることである。したがって、消毒・刺入・抜針および抜針後の処置の面で、いずれも特別な方法と遵守すべきことがある。操作上の必要事項、要点および注意事項を次に述べる。